

十春檢のことしの俣夫が駈出す

大正一〇

植ゑ年と云ふに床樹素枯るる春寒き

大正三

産み死ぬ鶴と見ゆ内濠を餘寒聲に

大正三

瀬變りにや渡頭餘寒の流れ瀧

大正三

通學の長靴水漏りて春旦

大正六

女追ふ鶯のたわれ春夕

大正六

藪上みけもの徒に打つ春夕

大正六

假病に藥盛る汝も春夕

大正六

一と渡海しようが春の夜の爐話に

大正六

歸朝その夜の春の疊の間ひろく

大正六

療疽を泣く飯場人春淺し

大正六

長蟲に孵る貝をなど竹瓮麗日に

大正四

乳離れ鯨うらら趁ふ波頭

大正五

艇庫拂ふ日残んの花うらら

大正五

病める心を第六感のなど日永き

大正二

永き日を弓矢試験も神職に

大正二

廳中の日永し活字引病みて

大正二

樂の説も音波よりせり日永き

大正二

軟々菜も病妻が記あり春惜む

大正二

焰吐きし刺桐春行いて雨褪に

大正二

水銀誤嚥しを聲濁みて樂師牙返る

大正五

露地ほの割る動石と見て牙返る

大正五

服部的村君送別句會 二句

帆光りす風向ひ春波の満ち來

大正四

淡紅の葉落とす楓樹か山日麗かに

大正四

爐塞いで義眼の曇り水磨ぎに

大正四

爐塞いで刮鬪子に附すを序の無かり

大正四

他山の石などと爐話ありしが名残なる

大正二

長崎大觀紙鳶合戦の文爛れ

大正二

石合戦も練武城下の凧の繪に

大正二

凧場暮るるに行きづりの友が獵話せり 大正二

坪とりに鴻の巢雛と紙幟 大正二

白兵戦を説き罷る門の幟晴る 大正二

紫衣ゆるる其頃に寺内苗代も 大正二

苗代の新庄に御染筆聞ゆ 大正二

花實たわわの四季橘に祭る雛 大正四

雛祭に身内の蘭機捲きしまま 大正四

雙槻かげりて庭面縁りす雛の灯に 大正四

宰領雛の白む鼻そそり藁沓に 大正四

解纏を祝ぐ紅酒も雛の宵となり 大正四

餓鬼飯も温食や佛別るる日 大正二

佛滅に法爾の芭蕉花垂れて 大正二

涅槃詣での山一つ誰も道草を 大正二

香焚くすべの新草の壘のあろじ 大正一〇

一字不刪の返稿や春雨の夕

大正二

ハルシヤ鹿毛の郷土いふ春雨の牧

大正二

臨池意なきも筆洗を春雨の朝

大正二

裙釵以外の意に碑も建ちぬ春雨の雨

大正二

鵬か尾を垂れ春雨の雁木

大正六

春の夜ふけの夕立めかし破風の物

大正六

貯材雑然と割端紅繪も春の雲

大正六

雨絲影りて澱を翔るもの春雲に

大正三

絛を引くかに濡帆這ふ春晝の雲

大正三

前方より襖を葭戸にす雲雀月

大正六

刺桐落花のみの雲雀月となりぬ

大正六

雲雀月の界限の相思樹匂ひ初め

大正六

雲雀月新竹手折り來ては食うべ

大正六

桐油着れば船蟲寄りす春の海

大正二

鱣除けにや流すもの春の海風ぎに

大正二

春一日の渡海して人魚いふ誰彼れの雨 大正二

如來待つ日暹人春の海近く 大正二

甘露とも水温む椰子バタ搾り 大正二

驟か知らず牧の附け飼ひ水温む 大正二

魚卵植うる遺傳の學に水温む 大正二

挿竹ついて地殻割れの春田に 大正六

農服に蛇添ふ春田水みちて 大正六

地絹染の紫紺いふ野山焼く頃に 大正四

燎原の火の勢ひ法幡驛移る 大正四

蜂舎焦がす野火に騒ぎし塔残る 大正四

公休日を官邸の庭そうぐし百小鳥 大正六

解糞すみて盥置くに囀る木 大正五

此の吃水に向ふ苧畑の囀れる 大正五

囀去りし田打櫻に槌くれん 大正二

飯盛の雅望が宵寐猫戀す 大正二

戀猫や冬は荒行の洲の宮に

大正二

沖つ波夜は聞ゆ鳴海猫の戀

大正二

花漬の壺仕舞ひ里の猫戀す

大正二

鮎も汲む見て驛がかり聞く宮言葉

大正二

學校の鐘に大地とぶ子雀の群れ

大正六

巢鳥鳴いて橋蝕す堂塔の里

大正二

防風の摘み頃を云ひやりし巢鳥鳴いて

大正二

慰斗絹の賣値いふ巢立つ樹を見居り

大正二

雉子塚など過ぎて旗亭に巢鳥見る

大正二

死病人の身内禮いふて來ぬ夕雲雀

大正六

まばゆき星の夜さり雲雀夢鳴きす

大正六

臺の蔭樹となり沼蜺春も夕立ちて

大正三

曾遊まざと棠梨覆ふ雨に蜺汁

大正三

鳥連翹の影げり染む水沫鳴く蜺

大正三

臂斷つ思を穩座いふ穴出蛇のあり

大正二

人の酔ふ花眞白ろ蛇の穴出端に

大正二

草埔蛇の穴出や碁盤脚の華

大正二

源内一流に放屁論じぬ蛇の聲

大正二

牛の不淨乾すが焚くもの蛇鳴ける

大正二

蛇の晝を聞き傳ての醫が明礬石を

大正二

地肌かわき切つて地蟲鳴くすべもなく

大正一〇

菱巴夫人を悼む

狂奔さまでもを旅仕舞ひ鳴く蛙

大正二

追善の橋架けて無礙の蛙鳴く

大正二

鹵簿とどろ谷垂の蛙けふ晴れて

大正二

田荒れ風を祈伏の蛙鳴く夜さり

大正六

ひねもすミテラ吊り飽く夕蛙

大正六

尺八舌のハロく四方より鳴く蛙

大正六

二枚襲ね一枚は脱げと鳴く蛙

大正六

掌のどつ底うづいて蛙鳴く良き夜

大正六

電柱突つ立つも無駄に田の蛙

大正六

年中氷を嚼みつつも蛙を戀し

大正六

雑音を唄ふ彼等に蛙鳴き傲る

大正 六

いつから居付く仔犬にや鳴く蛙

大正 六

墓のよに鳴く蛙一つ夜もすがら

大正 六

鶺鴒は鴝は來ずなりぬ夜さり鳴く蛙

大正 六

蛙つれ鳴きす蚊の力聲して

大正 六

人欺くに死にまねの蛙面白き

大正 六

泣く兒うとめば蛙の戀し今宵又

大正 六

掌の水腫れ久しく蛙鳴き初め

大正 六

龜鳴く此頃の寓居へのぬかるみ

大正 六

隱約のこと脚色に橋柳あり

大正 二

日見山の青柳や聖徒誓ふ時

大正 二

花待たぬ君ならじを一ト夜いたつきて

大正 二

甲黙行居士

花の散る三日晴れ尸位誹らるる

大正 二

鈴盜むなど花見客戯われたり

大正 二

巡講の日延び十和田湖の花も見て

大正 二

花の幕のぞきの筆や耳食の徒

大正 二

朴は禁斧に茶山奥あり渡り柚

大正二

御微行を畏みぬ茶山奥とのみ

大正二

庚門めくを茶摘女の笠置くところ

大正二

年中ビール飲み飽かず刺桐花散りて

大正六

カンナ藁に乳欲し山羊も芳草に

大正二

油肥も澁木高畑芳草に

大正二

馬も水痴せいふ野路となり芳草に

大正二

出洲も鋤く朱欒畑に草芳しう

大正二

小手鞠の花ながくし棚を垂れ青疊

大正六

柳垂れて蘭文を謝恩會の宴に

大正二

番犬の死を惜むに事を缺く柳

大正六

煤帆見れば鑛山通ひ出洲も花大根

大正二

囉嘛僧の消息も句に花大根

大正二

萋の花咲いて蛇の眠期は了ふ

大正六

筍の力鋭く地を割るいくつ

大正一〇

蘆の角の忿解けけらし水の空

大正六

蘆の芽煤びて往還を驛夫ゆききす

大正六

歸國して來し父焚いて木の芽飯

大正六

母方に祝ぐ事土筆盆にこぼれ

大正六

頭の好き土筆の好き渠れ命無くせし

大正六

恙ある身の法悦を風の藤纏れ

大正二

夕顔観音の六つ詣で藤の風落ちて

大正二

馬病みて裸温泉通ひ山の藤

大正二

新芽ふるるガラス窓ぬちに居て喉つまりらす

大正一〇

ゴムの芽の鋒立ちて雨流るる流るる

大正六

されば苦衷を手書せしが芹汁の朝

大正二

二郡歸一は民意なる芹生九分の水

大正二

麒麟草湯泉霧を浴びて真晝

大正六

ひこばゆる月桃を八十綱に絢はれて

大正一〇

十雄君を送る

夏

癌の利薬の問答も初夏の一と朝

大正六

亂箱に絲吐く蟲も夏の夜の

大正五

岩鹽や採る夏の夜を柚篝せり

大正二

裏峯越せば白樺も渡頭明易き

大正二

李嶽山本部

靄裏[?]む樹の翠り哨兵が夜短か

大正二

丁山無物子に示す

飯頭^{はんじゆ}子に佳賓の厨裡夜短か

大正二

やもめ孔雀の羽強よ打つ夏夕

大正五

醬瓜甜りて火酒の味秋も近からん

大正二

死落つ蟬も蓮草の葉風秋近かに

大正二

明治橋より仰ぐ神々し白日の夏

大正五

方陣しきたるが苜蓿の日の盛

大正五

炎天に地虫を酸鼻殺しよう

大正二

褐藻寄せて汐染まる炎天の岬

大正二

吉峰に凶鑼に炎天の雲崩れ

大正二

炎天に肩峰峙ち兵の泳ぎ

大正五

挿天山けふ蛙泳ぎして仰ぐ

大正五

プタミノ魚人に敏く旱天の雲

大正五

山梔子の残んの花土用明けの花

大正五

土用の三五日打返し綿通す針

大正五

土用明けの雲釣り雨降つて居る

大正 五

土用明けの萍を目高目高飛び

大正 五

源平かつら咲きそめてより暑き

大正 六

この暑さ細鱗をこそ望め築の魚

大正 六

禁酒會の一人のテーブル談義たゞ暑し

大正 六

大朝尖山

絶頂を卷舒す雲の帯涼し

大正 二

穴居めく竹屋に山雨涼しけれ

大正 二

ウライ山にて

四望晴れ指呼する涼し膳の上

大正 二

篠刈り進むに獨立樹雲飛ぶ涼し

大正 二

馬鳴山

蕃婦もの言へば唇促音瞳亦涼し

大正 三

舌鋒筆戦の聽て懷吐く涼しけれ

大正 三

樟の雨涼し山梔子忘れ花

大正 三

六魚韻など云ふ涼し替人訪へば

大正 三

來しな月澄み別るる宵の涼風

大正 六

蛸に晝寢覺めて竹鼓幽かなり

大正 二

耳孔を紙魚出て午寢覺めにけり

大正 二

家信折ふしの晝寝さめじをと鳴く鴉

大正二

大貨動くを諏訪山幟夕榮る

大正二

別れじの別れの内背の汗流るる

大正六

三度が二度は無駄なと思ふ食事に汗ばみ

大正六

山燕の空や夕榮ゆわが裸

大正九

君が魂飛ぶかと夕立雲仰ぐ

大正二

夕立晴れ樟添ひ合歡木の蔭深し

大正二

ひたぶるに氷かみては嚼み我が命

大正六

口づけて璉霧落ちつ籠枕

大正五

濕布してうたたねの籠枕の行方

大正九

救命綱ひくを見つつわが單衣を吹かれ

大正六

育つと云ふ犢劬はる我の夏衣

大正六

夏服の守衛長脊なの蠅叩かうとせず

大正 六

雷鳥死にたれば吊りぬ心太

大正 五

薑と女いち老ゆれ冷奴

大正 五

李嶽上二句
一日一信を鶴首して夏の月圓か

大正 二

醬瓜得つ夏の山月酌むよかり

大正 二

天田那所見
慰問使の牛も上せぬ夏の月

大正 二

營前までは無腰も許れて夏の月

大正 五

夏の月猫鳴き鳥の枝うつり

大正 五

犬よりも愚かなるをんなを叱り夏月夜

大正 六

水無月の刺桐葉のみ花つけて

大正 六

緬甸合歡木の日々の晝を雲の峰

大正 五

慌しき別れの夏の雲下り居

大正 六

店内暗うす梅雨に人々鯉口を

大正 五

見馴れ榕の葉垂れ落つ夏の雨

大正五

鳴くものの羽蟲紛れず夏の雨

大正五

ヒンガン綿木いち綿吹かす夏の雨

大正五

津の樹望む夕立晴流瓶もせり

大正二

桂一ト樹を征疫の屯夕立てる

大正二

歸舟待つに尙忸怩夕立晴れずとす

大正二

夕立光りすチーク樵る山も領海に

大正四

ユウカリ柳地を擦る強雨の夕雀

大正九

陸す我を旅草鞋虫とさみだれて

大正二

花房くだつ太桃の顆々さみだるる

大正二

蔭の祭せんすべを洲宮さみだるる

大正二

漿果もぐまを響應や青東風に

大正二

江上み構を鷄騒ぐ木香も青東風に

大正二

蔓絢ふ機など漁休み青嵐

大正二

合歡瀧など蕃山めかず青嵐

大正二

青嵐玖磨振りの築も行きずりに

大正二

運河工まん意動けり夏の山を前

大正二

當年の死戦云ふ夏山案内して

大正二

夏苗代ひろごるを竹鷄の歩み

大正五

雲間瀧の無響ただ目に蟬の聲

大正二

改葬も待つ伐採や蟬時雨

大正二

李嶽山附近
山氣冷晴

炎帝の威ほのと蟬も鳴く時分

大正二

油蟬じりつく禿び樹の地肌の日

大正九

春先きからの裸の我に子雀鳴いて

大正六

柱曆まで糧運ぶ蟻の一つ一つ

大正五

白日の大地の勞蟻一日のみちのり

大正九

まがつみの蠅叩汝れ螻蛄居る

大正五

ドウダン穢して田水引く宵の灯取蟲

大正五

雑兵も蟲うるさがり焚くに灯取蟲

大正六

螢澤の名に立ちし溺る幾夜忌む

大正二

渡り樹の舟津晴れ螢高き宵

大正二

曳舟絶ゆを機の里粒ら螢降る

大正二

ここら地方代搔き雨の粒螢

大正六

月照りすさまじき夜の糠螢

大正六

屍室よりつき來し蚊を憤る

大正五

蚊雷となりし祭火の宵の雨

大正六

蚊帳とれて眠安けく虻蚘來るも

大正五

つつじ葉の勢ひ見る鮎焼くに

大正六

龜鳴かすなりて暑し古襖

大正六

帶屋への忘路なり河岸の水馬

大正五

返しゆれ波なだれの波の水馬

大正五

囚屋への川面すべれる水馬

大正五

カンナ見つめてけだるし蔭の水に水馬

大正五

雑魚汁なりしを朝餉待つ久し行々子

大正六

この洲の三極を巢立ち育ちし葭雀

大正六

葭雀鳴けば湖鱒の行く疾き影を

大正六

出水の磧を巡查ゆききす行々子

大正六

すがり飛ぶ仔も仙鼠の後を御砂踏み

大正二

團扇祭も中日なる夕蚊喰鳥

大正五

逆さ銃の一隊過ぐる蝙蝠二つ四つ

大正五

晝夜咲く藪草に蝙蝠とべる

大正五

珍饌の蛙を釜中にせり蚊喰鳥

大正五

野垂死も男業なる堤蚊喰鳥

大正五

諸聲の託兒場の前を蚊喰鳥

大正五

楣の仙鼠か尿臭うせり移住む

大正六

此家呪ふ蛇の出城の槻枯れす

大正二

蛇戀ふる犬走り蘆薈黄花あり

大正二

日架樹の蛇を生徒等は目敏く

大正五

魚池の設けに蛇慌し

大正五

ぎらつく日中の未草の蛇

大正五

規那木三五尺の空を蛇うごく

大正六

燕巢ま一と釜に蛇穴を匍ふ

大正六

蛇取島渡り初めて夜飼ひもす

大正 六

墓の聲二た處遠吠を忌む

大正 五

膝皿鳴る夜の墓呼ばひ

大正 五

案内女も温泉の薬師山に田蘭晴るれ

大正 二

孳け魚も尙蘭處の月圓か

大正 二

女等瓦洗ひ飯うましと麥青し

大正 二

源四郎畑の甘藷の蔓の尋常ののび

大正 九

連翹の葉もかさみつつ新芽立

大正 六

無腰の夫の側を這ふ蛇の花が紫

大正 九

唐辛青う立つ廣東の大構

大正 五

舐犢の愛まこと隘藜住ひ胡芋掘る

福屋分遣所々見

大正 二

擊析は無き公疊の芭蕉玉を卷く

大正 六

夏水仙のぬれにし朝の女子卵賣かや

大正 九

峯筋なる百日紅の鳥や蛇狙ふ

大正五

松葉牡丹すさめる晝の螢蟲か

大正五

合歡木ねむり時の風筋しるき

大正六

合歡木全くねむり樹々の風落ち

大正六

蟬蟲の出る出端の相思樹や高し

大正六

逢ふたばかりに行く汝に朱欒うれず

大正六

雞聲を病む兒晝も聲して庭躑躅

大正六

四睡待つか内灣にて一句に西瓜冷ゆ瀧も音なへり

大正六

西瓜割くも卒直蕃人會見に投誠のあり

大正二

梅漬甲句一のちよろげ熟るるを忘れ

大正五

青梅はつゝ棒喝に犬の尾を垂れて

大正六

つぶくの青梅さなかの紅玉小梅

大正六

青梅はつゝ腐り蓑蟲と落つ

大正六

先生胃弱にも烏龍茶断たじ青梅くだつ

大正六

歸燕匆匆々 (大正元年)

十一月十六日午前六時臺北驛發

烏羽玉の虚空割るひびき冬の朝

桃園街所見

柳科めくも枯れずて相思樹左右みどり

新竹街は騒動めきしと聞く

山燕山に去り四庄稻架見ざり

中港驛か

朱欒呼び値に銀貨投げし驛口

苗栗街

冬の暉照る煤煙の檜材夥し

大安溪
猩紅石褐土を斷層の素涸れ川

後里庄
洋紅砂や敷く後里鋤きて梅早し

葫蘆墩
新米は驛に滿つ製麻盛るかに

臺中驛
冬の眞晝を三和土築いて斧鑿の痕のあり

彰化公園
璉霧大樹に城下めく景を去ぬ燕

醫學校卒業生諸子の歡迎會に臨む
ぬくきもの頂いて匆々に旅の冬

二八水驛は全く暮れたり
刈田を展ぶるのみ逢魔時の二八水

安平見物（朝七時二十分トロ發す）
魚塭明けしまま水むぐり疾き月の痕

赤崁城の榕樹は昨年の
沙風に枯れたりといふ
國際和平の威を懷ふ時此木枯れ

安平所見三句
寒潮の埕洗ふて鷺軍屯せり
出洲を又逝く水の光る柴の牡蠣
冬日かつ灼く瀦をまこと魚蝦の友

臺南御遺跡拜觀
市塵さへ尊と冬の日麒麟花に

開山寺
斷聯さまでを梅ありて飽かず日短か

新樓病院參觀
刀圭の威もて教説く冬の星月夜

九曲堂畫壁
脛を沒せし沙土拂ふ樹蘭珍づ宿に
芎蕉荒める西風に筏かつら照る

下淡水溪三句
宏圖私かに河伯にや謀る冬の揚雲雀
大河ただ洲のみをいきれ立つ冬の草
洲の廳なぐれて沙嶼や甘藷の花

屏東公園
様仔冬木を央に綠蔭濕める風

阿緱郊外二句
椰子林に檳榔そそれば通し蝙蝠が
鷺去れば沼の黄鰯魚聲す冬の月



昭和三年十二月

不折寫

新作
清元

島根の壽茉莉の花笠

齊のや魯人作

「ウタヒ」四方の國は天の壁立つきはみ、國の退き立つかぎり、青雲の棚曳くきはみ、白雲の墜居むかぶすかぎり、青海原は棹舵ほさず、舟艫の至りとどまるかぎり、大海に舟満ちつゞけて。

さるほどに、遠き國は八十綱うちかけて、引きよすと、言わき白せしは、石の上み古き國引の傳へとかや「アヒ」七星の「アヒ」七夕姫に言問へば、駿河なる不二が峰ならぬ新高や「アヒ」大武の靈嶽の青嵐に畑つもの皆稔るなり。

挿天の山かつら「アヒ」呼ぶ呼子鳥人告鳥よ、羽衣の松、清見が瀉は無けれども、其面影の淡水に、淡水富士をうつしたり、住めば嬉しき同じ島、思ひも同じ人心「三下り」ままよ三度笠かぶるも粹な、二木の花の中に立つ、藤紫の風匂ふ、拂ふ露さへ戀衣。

春秋如らぬ島にして、四季とは云へれ、深緑り、玉垣さへや埋むらん「アヒ」風や光りて野も山も、唐紅に咲き匂ふ「アヒ」永劫飽かぬ眺めかな「アヒ」さるにても何事ぞ「アヒ」花見る人の長刀、あつたら憎い「アヒ」玉櫛筒鹿爪らしい箱面の「アヒ」眉なら髯なら鼻毛なら「アヒ」抜いては抜いて、黒焼にする粉なにする奇妙長命の薬ぞや「二上リ」ここ鴉啼く奥山家「アヒ」樟は茂りて天空を覆ふ「アヒ」やよ楠氏と云へば賤が赤子にも嗚呼忠臣の心の核ぞ植うるらん「アヒ」檜舞臺の阿里山に「アヒ」馬爪立て、のぼり來れば「アヒ」林相綾やに、樹海また、底つの限りなかりけり「アヒ」山葵ありて俗ならしめず辛き物、腋下清風おのづから、げに天人の五睡もかくばかりなる「二上リ」五月雨を竹原もれし月影に、濡れ羽比翼のちらつく鏡池、椰子の葉蔭を夢枕、由縁も深き南を、戀しゆかしの熟睡かな、うれしけれ「アヒ」唐土と大和は疇昔より、妹脊のちぎり浅からぬ「アヒ」管巻き上戸泣き上戸、やんれ一杯巨觴に「アヒ」初會ぢやあるまい、幾夜も重ね「アヒ」重ね重ねて心の底を汲むよすが「アヒ」此の島臺の月ものぼれり「アヒ」鵲の渡す橋さへまのあたり「ア

ヒ」北山時雨ぢやない故に、ふられて歸ることもない「アヒ」御宿の首尾は上々吉「アヒ」痴話と口説は糸瓜の皮よ「アヒ」金々輪の金輪才、地藏の顔も二度三度「アヒ」道行氣取りは若氣の沙汰よ、早く世帯を身を固め乗合船を唄はずや。

千年の限りも無き「アヒ」樹齡を「アヒ」陰陽めぐりて「アヒ」いや蒸す光り苔「アヒ」動かぬ岩根こごしうて「アヒ」朝夕に河鹿鳴く。頃しも大正六つの年「アヒ」その水無月も「アヒ」五風十雨時を得て、盡きぬ壽、この島の恵みの露や繁からん〜。

不許
複製

昭和八年十二月八日印刷
昭和八年十二月十日發行

【定價金貳圓】

東京市小石川區大塚仲町四十一番地
著作者 兼發行者 細谷雄太

東京市麴町區飯田町一丁目廿八番地
印刷者 大島新

東京市麴町區飯田町一丁目廿八番地
印刷所 大島印刷所

終

